

# 大森哲学「前期」「後期」の接続

横山 達郎 (Tatsuo YOKOYAMA)

慶應義塾大学

大森荘蔵（1921-1997）は、その哲学的キャリアの全体において、数度の哲学的立場の転向を行っていることが知られているが、その最も顕著な例は「前期」における「知覚像一元論」から、中-後期における「立ち現われ一元論」への移行である。

大森哲学は、「飽くまでも我々に与えられ得る経験的所与に立脚して、“物自体”といった経験を超える“超越的”概念の意味理解を与える」という、経験主義の立場を採るといふ点においては確かに生涯を通じて一貫していたが、そこにおいて言われる「経験的所与」は、前期における「知覚」から、やがて、「想像」「想起」といった他の心的概念の一切を「立ち現われ」の名の下に包摂することによって拡張されていった。すなわち、大森哲学全体の文脈において、「前期知覚像一元論」とは「立ち現われ一元論」への過渡的理論であったと見做されるのが通例となっている。

そして、この移行のモチベーションとなったキーワードは、我々の実際の知覚経験において、我々が対象にそこに籠めるとされる「思い」という概念であった（我々の知覚体験においては、直接与えられ得るのは対象の極めて限定的な側面のみであるが、我々はそこに「内部」「背面」「時間的持続」等、それ自体としては知覚体験としては与えられざる様々な「思いを籠めて」見ることにより、机は机としての意味を持って知覚される）。

しかし、本発表においては、「前期」における立場（知覚像一元論、重ね描き論）を構築した際、大森が日常言語から「知覚像言語」という特殊言語を析出する際に用いた「意味切断」という概念を再解釈することにより、前期における枠組みを基本的に保持したまま、この「思い」の概念をそこに包摂すること、すなわち、大森哲学の「前期」「後期」を有機的に「接続」することの可能性を示す。この点においては、先行研究（野矢茂樹、『大森荘蔵—哲学の見本』（2007））において示された、「知覚像言語命題の固有名説」に対し、発表者による「知覚像言語命題の描写説」を提示することを軸とする。

本研究の結果はまた、「意思、自由といった、“心の能動的側面”の適切な定位を巡る困難」という「立ち現われ一元論」が抱える難点に対する、「大森哲学」の本質を維持した上での一回答となり得るものと考えられる。